

## 昔話を聴き続けて 「昔話採集家」・佐々木徳夫氏の半世紀から

昔話採集家 佐々木徳夫氏

インタビュアー 川島秀一氏 飯倉義之氏

コメンテーター 野村純一氏 根岸英之氏

司会進行 高木史人

たとえば、柳田國男が「口承文芸」という語を立ち上げた一九三二年（「口承文芸大意」）から既に七十四年の歳月が流れた。こういいう言い回しを、以前にもどこかで試みたことがあった。歳月は人を待たないという。「柳田國男が……を」してから「何年という民俗学や口承文芸によく試みられる言い回しとは別に、世間では「戦後」何年という言い方が多い。考えてみると、「口承文芸」の七十四年のうち、既に六十一一年が「戦後」の口承文芸研究である。研究の時間が、物理的なそれとは異なり、戦前の黎明期が眩く感じられる気持ちも分からないではないが、「戦後」はかくも長い歳月を物理的に積み重ねた。ついでに言うべく、柳田國男が亡くなったのは一九六二年である。「柳田後」から数えても既に四十四年の歳月が流れている。つまり、一九三三年すなわち「口承文芸」元年から差し引くならば、「口承文芸」研究は、柳田生存中が三十年間、柳田没後が四十四年間である。すっきりと、物理的な時間の流れは、柳田を遠い彼方に押しやっている。数年前、日本民俗学会談話会において、インタビュアー「回顧と展望」が試みられたのは、柳田國男が遠景化したこと、戦後が分厚い物理的な時間を重ねたことと決して無縁ではあるまい。しかして、「回顧」としての当時の事実確認・状況説明は果たされたとして、聴き手の誘導なき「一人語り」が、将来の民俗学への「展望」にまではたして辿りつけていたかと問うならば、それは正直評価の分かれるところだろう。

さて、今回の例会では、佐々木徳夫氏という結実した昔話「採集」の先達の「実践」の軌跡を、二人のインタビュアーを得て、一方では本人を交えて辿る「回顧」によって過去の「実践」（いとなみ、プラクティス）を確認しつつも、他方では佐々木氏の発言をいま・ここの研究の一寸先は闇を切り拓く松明といただいて、最終的には「口承文芸」あるいは「口承」研究の、いま・ここにおける「方法」を「展望」することを目指す。

佐々木氏は、宮城県を中心に岩手県・山形県・福島県まで足を伸ばして採訪を重ねる「昔話採集家」である。佐々木氏が聴き取った昔話の数は現在まで、「一万余話」だという。こうした佐々木氏の「実践」の成果が、宮城県を「昔話不毛の地」「調査の空白地帯」から一転して、「昔話の宝庫」へと変えた。自他共に認める昔話採集の「名人」であり、すぐれた「聴き耳」の持ち主である。

そうした、佐々木氏に代表される卓越した聴き手の「実践」は、従来、俗に「名人芸」とも称えられて、それは個人の才に大きく拠るとみなされてきたものではなからうか。これは、佐々木氏を離れて省みても、従来、「口承文芸採訪」や「民俗調査」に「方法」はない、「と」しは繰り返されてきたように思われる。頭で考えた「方法」を用いるのではなく、身体での「実践」で知るべきである、という意見である。けれども、こうした物言いは、問題がある。何となれば、「実践」する身体を持つ者にとっては、「実践」の方法があまりにも自然な自明なふるまいとなつて深く心身に刻み込まれてしまっているがために、そのすぐれた「方法」をもはや自分じしんでは切り離してそれと意識することができ

なくなっているからである。けれども、すぐれた相撲取りが、何だか知らないうちに技をかけて勝ったとインタビューに答えていた場合でも、テレビの視聴者たちが彼の発言の背後には、すぐれた稽古（方法）技（修得過程）があったことを相撲部屋への取材番組などから得た知識などによって知っているように、昔話の聞き手としての実践にも、そうした方法（修得過程）は厳然と存在していたとわれわれはみるべきであらう。存在していないとみるのは、相撲にならずらえるならば、それへの取材が足りなかったからではなかったか。

ところで、方法（あるいは作法、みぶり、手つき……等）の存在は、同一の、または似通った方法を持つ者の間では気付きにくい。方法が存在することが意識化されていないために、例えば、調査の場を同じくするなどの機会を得なければ、互いの方法が異なることにさえも気付くことができない。われわれはなぜ昔話を聴いてしまうのか、聴くことができってしまうのか。これさえも、思えば不思議な身体のあるようである。

一九五七年に思い立ち、佐々木徳夫氏は高校教師の学問的実践として農村の民俗調査を始めて、さらにそこから進んで昔話（そして艶笑譚）の採集に至ったという。

佐々木氏には、習うべき教科書や模倣すべきモデルが（たとえば「先輩」などから）無自覚に与えられたのではなく。独学によって、自らの意思で学ぶべき対象を探し当て、方法を形作っていった。そうして一万余話を聴き集めるに至った。われわれは、今こそ佐々木氏という稀有な昔話の「採集家」の声に耳を澄ますことによって、「口承文芸する身体の方法」を、さらには、実践の成果としての「昔話集の方法」までも含めて、改めて意識化することができるのではなからうか。

佐々木徳夫氏には『みちのく「艶笑・昔話」探訪記』（無明舎出版、一九九六年刊）、われ成り成りて 昔話採集家の人生手帖』（佐々木徳夫ふるさとの会、二〇〇一年刊）という、昔話「採集」の経験を振り返った好著があった。これを、たとえば、学生研究会という集団の「探訪」を旨とする団体における方法の継承と変化の「歴史」を描いた『大 学研究会による昔話研究の50年 フィールドワークの記憶と記録』（國學院大學説話研究会OB・國學院大學民俗文学研究会OB有志、二〇〇五年刊）などと照らし合わせつつ、佐々木氏の「昔話採集」の方法とその形成・自覚・発展の経験を伺うことを通じて、「口承文芸を「聴く」ことのできてしまっ、いま・このわれわれが持つさまざまな方法をも意識化していきたい。そこから、冒頭に述べたように、物理的時間が、既に、柳田没後が生前を遙かに越えてしまっ、いま・このわれわれの向後の「展望」への道筋も自ずから照らし出されてくるのではなからうか。

（文責・飯倉義之／高木史人）

#### 佐々木徳夫氏略歴

一九二九年、宮城県登米郡中田町石森（現・登米市）に生まれる。東洋大学哲学科卒。宮城県立登米高校豊里分校（夜間部）勤務の一九五七年から昔話の聴き取りを始め、一九六六年『酒の三太郎』を刊行。以降、『むがす、むがす、あつとこぬ』『夢買い長者』『日本の昔話』一 永浦誠喜翁の昔話』『陸前の昔話』『みちのく艶笑譚』『遠野の昔話』『遠野の昔話 笹焼蕪四郎』『狼の眉毛』『馬方と山姥』など、四十数冊の昔話資料集をまとめる。

一九九二年、第二六回吉川英治文化賞受賞。現在、福島県奥会津地域での昔話調査を精力的に進めている。